琉球大学学術リポジトリ

舌癌患者におけるVEとVFの互換性の検討

メタデータ	言語: English 出版者: 琉球大学 公開日: 2014-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 幸地, 真人, Kouchi, Masato メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/29032

（別紙様式第３号）

論　文　要　旨

論　文　題　目

Evaluation of the compatibility in VE and VF for tongue cancer

氏　名　幸地 真人　印

論　文　要　旨

【目的】口腔癌患者は外科的手術後、特に頸部郭清術後に摂食・嚥下機能障害が生じることが多い。今回われわれは舌癌患者を対象に、嚥下造影検査（VF）と嚥下内視鏡検査（VE）を用いて摂食・嚥下機能評価を行った。VFとVEそれぞれの評価項目を照らし合わせ、簡便だが評価に主観的要素が強く含まれるVEが、専用の設備が必須であり、被爆の危険もあるが、客観的評価が可能なVFとの互換性の検討を行った。

【対象】2009年1月から2012年12月の4年間に当科で舌癌の加療を行い、術前術後にVFとVEが施行された舌癌33例を対象とした。年齢は28歳から80歳で、平均55.9歳であった。全例に再建術は施行されてなく、舌部分切除術群18例、舌部分切除術と頸部郭清術を行った群15例であった。

【方法】VF、VEは術前と術後2週から4週間に検査を行った。VEはエンゲリ―ド®

＊要旨は3枚（1200字以内）にまとめること。

(20×20)

（大塚）を用い摂食・嚥下リハビリテーション学会の評価に準じて咽頭残留、喉頭侵入、誤嚥の項目を評し、加えて咽頭クリアまでの嚥下回数とホワイトアウト時間を測定した。VF撮影時の体位は座位とし、正面、側方撮影を行い、舌骨の位置、移動速度、咽頭通過速度（PPT）、咽頭反応速度（PRT）、食道括約筋（UES）の最大開大量を測定した。

【結果】舌部分切除術群では、術前術後でPPTおよびPRT、舌骨の位置、移動速度に変化は認めなかった。舌部分切除術および頸分郭清術群の術前術後のPRTは、術後で遅延し、PPTも術後に延長する傾向が認められ、また舌骨の位置の下後方偏位が認められた。舌骨の下後方偏位が認められたVE所見では、咽頭残留、喉頭侵入、誤嚥などの所見が確認された。これらの結果において、VEの咽頭クリアまでの嚥下回数が多い程、PTTが延長する傾向が認められ、またホワイト

＊要旨は３枚（1200 字以内）にまとめること。　(20 × 20)

アウト時間とPRTにも関連がある可能性が示唆された。

【まとめ】頸部郭清術は、舌骨の位置を下後方に偏位させることから、咽頭収縮機能が減弱し、咽頭残留などの嚥下機能障害に影響を与えることが考えられた。VFを行える環境にない施設でも、VEを用いることでより客観性を持った評価を行える可能性が示唆された。

＊要旨は３枚（ 1200 字以内）にまとめること。　(20 × 20)